2025 年 1 月 11 日（オンライン開催）

日本アメリカ文学会関西支部 1 月例会 / 若手シンポジウム要旨

現代アメリカ文学における「ポスト（以後）」

私たちは今「ポスト・コロナ」の社会を生きている、と言われるようになって久しい。しかし、その一方で少なくとも今年の夏は感染拡大がまたもや顕著となり「第 11 波」という表現が報道で用いられていたことを思い起こせるかもしれない。この COVID-19 に関する言説一つ取っても、「ポスト」という接頭辞が用いられることで捨象されてしまうものは決して少なくない。一般社会が便宜上恣意的に採用する「以前／以後」の区分によって、物事の見方が規定されるという見方はできるだろう。しかしながら、その一方で、そうした区分の作為性に目を向けることで新たに生まれる議論もあろう。そして、この作為的な区分は単に世界規模の疫病や戦争のみに限定されるものではなく、個人レベルでも大いに生じうるものである。それゆえ文学世界における登場人物たちもその認識に多かれ少なかれ影響されている節はあるだろう。

そんな問題意識を念頭に置きつつ、本シンポジウムでは Toni Morrison, Karen Tei Yamashita, Don DeLillo, Emily St. John Mandel の作家 4 名のテクストにおいて、何か重大な出来事が起こってしまった後、果たして何が残されているのか、あるいは人はいかにその状況を生き抜いていくのか、検証していきたい。（近藤佑樹）

思わせぶりな語り—— Toni Morrison の *Jazz* を読む

第一次世界大戦後に迎える狂騒の 20 年代、ハーレムで起こったある愛人殺しを中心に物語が展開する Toni Morrison の六作目の小説 *Jazz* (1992)は、異性愛間に生じる歪な愛を主題としながら、冷え切った夫婦関係が次第に修復に向かう様子を描いている。前作の *Beloved* (1987)同様、*Jazz* の登場人物たちもまた、最終的にはロマンチックな愛によって救いを得るのだが、小説の終盤、一連の物語を語ってきた正体不明の語り手は、彼らの大っぴらに表現することのできる愛に対し、羨望の眼差しを向ける。語り手のアイデンティティをめぐっては盛んに議論されてはいるが、もしここに語り手のクィアな欲望を見出すとするならば、語りの中に示されてきた矛盾や不安定さに、何らかの態度が隠されているかのようにも見える。本発表ではそんなクィアリーディングを誘うかのような思わせぶりな語りを出発点とし、その読解可能性について検討したい。（杉本はなな）

日系アメリカ人三世としての集合的記憶の物語化
—— Karen Tei Yamashita “KonMarimasu” を中心に

Karen Tei Yamashita (1951-) の *Sansei and Sensibility* (2020) は Jane Austen (1775-1817) の *Sense and Sensibility* (1811) をオマージュした短編集で、第一部の “Sansei” には日系アメリカ人三世にまつわる物語が、第二部の “Sensibility” には Austen 七作品を日系アメリカ人視点で語り直した物語が収録されている。太平洋戦争下の日系人強制収容を直接経験していない三世作家にとって、その歴史を物語化することは重要な課題である。本作の第一部に収録された “KonMarimasu” は、アメリカでも人気を博している近藤麻理恵（こんまり）による、“simple” な状態を理想とし断捨離を推奨する「こんまりメソッド」に対して「コンマリマス（困ります）」と批判的視線を向け、強制収容に関する集合的記憶を保存するため、博物館展示や文学表象によって「物語化」することの意義を示唆する。本発表では、同短編集の他の作品も補助的に用いつつ、日本的美徳とされてきた「もったいない」と相反する価値観によって日系アメリカ人の文化的遺産や集合的記憶が棄却される危険性への Yamashita の皮肉を読み解き、日系人強制収容という歴史上の事件を多角的に現代に結びつける三世作家 Yamashita の試みを考察する。（小谷真由）

アメリカン・アポカリプスにおけるシャングリラ
——現代アメリカ文学と映画におけるチベット表象を手がかりに

「ポスト○○」は Don DeLillo による *Zero K* (2016)を考察する際にしばしば用いられるキーワードである。先行研究において、人体冷凍保存（クライオニクス）による不老不死の追求と脇役の monk のチベット仏教への興味というキャラクタリゼーションから、ポストヒューマニズムやポストセキュラー論を用いた論考は多いが、チェリャビンスク州の隕石落下の数年後、いわゆるポスト・アポカリプスにおいて、ポスト・エバンジェリストと自称する monk の行き先が、チベット仏教の聖地のヒマラヤ山脈であるという点はめったに注目されていない。一方、アポカリプスとチベットを結びつける表象の歴史は古く、James Hilton による *Lost Horizon* (1933)に遡る。このつながりを描いた *Zero K* と同時代の米国のポピュラー・カルチャーの例としては、*2012* (d. Emmerich, 2009)、*The Creator* (d. Edwards, 2023)が挙げられる。本発表では、これら３つのアメリカン・アポカリプス作品を取り上げ、その中のチベット、チベット民族、チベット文化がいかにアメリカ人作家と監督によって表象されてきたかを明らかにし、*Zero K* におけるヒマラヤ山脈が果たす役割について論じたい。（王立珺）

文明崩壊後のターミナル

—— Emily St. John Mandel の *Station Eleven* における生存とモビリティ

もし、「ジョージア・インフルエンザ」なるものが大流行した結果、世界中の人間がほぼ死滅してしまったら、（北米にいる一部の）残された者たちはいかに生きていくのか？ Emily St. John Mandel による *Station Eleven* (2014) はそんな問いを読者に投げかけている。先行研究において、主人公の Kirsten がシェイクスピア楽団の役者として北米を巡業しているという設定から、シェイクスピア作品との間テクスト性や、ポスト・アポカリプス小説としての世界設計に注目する類の分析は見られるが、主人公たちの最終目的地が、変わり果てた空港であるという点に着目する議論はほとんどない。本発表では、まず Mandel の過去作におけるターミナル表象を概観した上で、もはや乗物が空を飛べなくなってしまったこの世界で、人が移動し、生存することの意味がいかに変容したかを確認し、本作における空港という場がもたらす効果について議論したい。（近藤佑樹）